

Title	現代日本における葬儀と死生観の変容に関する民俗学的研究
Sub Title	
Author	山田, 慎也(Yamada, Shinya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.52 (2001.) ,p.92- 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000052-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

せたと見えよう。1970年代から80年代のベンガルでの歴史学の成果を、人類学の領域によく移し代えていると言える。

第二は、村落と王権の問題についてで、1960年代以降のインドの人類学に大きな影響力を及ぼしたデュモンの社会論を批判する意図があるが、別の見方をすれば、本論文の研究成果は、現在、南アジア歴史学で大きな潮流をなすサバルタン研究に重大な一石を投じたことにある。従来の研究は、エリートとサバルタンは断絶し平行した政治領域を形成するという前提に立っていたが、これはサバルタンの領域があまりにないがしろにされているということのみ意味のあることであって、多分に問題性を含んでいる。本研究はエリートとサバルタンの各領域の関係を具体的かつ詳細に描き出すことによって、新たな問題提起を行ない、人類学の枠を越えて検討されるべき課題を提示したと言える。

本論文の特色は、民俗誌の記述でありながら、体系的を持ち、各所で解釈が巧みに組み合わせられている点にある。これは、明確な理論的見通しをもって慎重に調査地を選定し、徹底的に調査することで可能になったとも言える。この村落には女神の聖地（シャクト・ピート）としての寺院があり、村落の多様な相互関係を結び付ける結節点として機能しているという点が、論文の性格を規定している。これは長所でもあるが、調査地の特殊性や地域的特色をベンガル全体に押し広げて考えることには若干の躊躇がある。また、単一村落での徹底した調査による考察としての意義は大きいですが、特定の地域社会をやや完結的に描き過ぎることも問題点かもしれない。他の地域との比較による差異を考慮すれば、歴史的变化や植民地化の影響の差異がより明確に浮き彫りにされ、急速に進む社会変動の影響の考察が付加されてより現代的な民俗誌的研究になった可能性もある。

研究の焦点は、極めて正統的な人類学の手法による儀礼の分析にあり、それを社会組織の側から考察するという観点をとっていることから、現代の人類学の焦点となっている儀礼のイデオロギー性や実践共同体の研究から見ると、やや保守的な側面もある。現代の状況を幅広く取り込んだ考察は今後の課題となるであろう。また、分析手法は、時には従来の人類学理論の適用による強引な論証もあり、現地の概念や文脈に即して地元の側から生成されてくるような考察が加えられれば説得力を増したであろうと思われる事例研究も見受けられた。この点についてはベンガル語の能力を今後の研究に生かしていくことを期待したい。確かに、調査資料の蓄積は膨大で

あり、筆者の考察のようにある程度一貫性を持たせた解釈をしないと、資料の海に溺れてしまうとも言える。筆者はこの点について十分に自覚しており、多元的解釈の可能性を残すことを今後の課題として提示している。

最後に、ベンガル語の音写についてであるが、若干の問題点があり、鼻音記号の表記の揺れや、長音の表記に一貫性がないなどやや不統一の感があるが、これは筆者の問題というよりも口語と文語の差異、表記法の未整備など、今後の異文化記述の課題かもしれない。

いずれにしても、本論文では、特定村落における儀礼の実践体系を総体として描き出す意図は十分に実現され、その学術的価値は高い。特に、ベンガル語を駆使した厚みのある記述と解釈は、日本のベンガル研究ではこれまでにない業績である。豊富な資料と一貫した方法論によって貫かれた本研究は、細かい点では問題を残すとしても、全体としてはそのスケール・理論的展開・総合性からいって極めて大きな学術的貢献であると言える。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士（平成12年10月11日）

甲 第1866号 山田 慎也

現代日本における葬儀と死生観の変容に関する
民俗学的研究

〔論文審査担当者〕

主査 慶應義塾大学名誉教授・
國學院大学文学部教授

文学博士

宮家 準

副査 慶應義塾大学文学部教授・
大学院社会学研究科委員

文学博士

鈴木 正宗

副査 大正大学文学部教授
文学博士

藤井 正雄

論文審査の要旨

本論文は、葬儀が様々な位相における死を総合的に処理する装置であるという観点から、現代の日本の伝統的な葬儀と現代の葬儀を比較・対照し、その変化の過程を考察して、これに伴う死生観の変容を明らかにすることを目的としている。前半部では新潟県佐渡と和歌山県古座という地域社会において、伝統的な葬儀がどのように

死を処理していたか、葬儀がどのように変わっていくかについて分析している。後半部では、葬儀が変容する過程で急速に成長した葬祭業者に着目し、その介入が顕著になる中で、葬儀と死生観が変容する過程とその与える影響について考察を加え、現代における死の意味の変容と現代人の死生観を分析している。内容は以下の通りである。

第1章 研究の対象と方法

第1節 研究の対象

第2節 研究の方法

第2章 伝統的な葬儀と死生観—新潟県佐渡島の事例から—

第1節 死の行為実践的処理とその社会的基盤

第2節 死の観念形成と予兆

第3章 村落社会における葬儀の変容と葬祭業者—和歌山県古座町の事例から—

第1節 葬儀の変容と地域社会

第2節 葬儀の内在的变化

第3節 葬儀の外在的变化

第4章 葬祭業者の成立と展開

第1節 葬祭業の成立とその様態

第2節 葬祭業者の社葬と地域社会

第5章 葬祭業者を利用する人々

第1節 文書資料から見た葬祭業の利用

第2節 知識の提供者としての葬祭業

第3節 死を受容させるもの—輿から祭壇へ—

第6章 結論

第1章では、研究の対象と方法について述べる。先行研究を概観し、最初に死の概念を検討する。葬儀は死を契機として行なわれるが、死自体が重層的なカテゴリーによって構成されているという。それを肉体的現象としての「生理的な死」、人格が死者として生前とは異なる存在となる観念レベルの「文化的な死」、社会の構成員が消滅し役割を果たせなくなるという「社会的な死」に分けて考える。これに、社会学者エルツの葬儀の儀礼分析における3つの観点、「遺体」、「死者の非肉体的人格（霊魂）」、「残された生者」を考え合わせる。死者は、「生理的な死」によって「遺体」となり、「文化的な死」によって「死者の非肉体的人格（霊魂）」が分離されて「死者」となり、「社会的な死」によって死者の社会的役割が「残された生者」に分配される。葬儀は「遺体」、「死者の非肉体的人格」、「残された生者」が、死以前の状態から分

離し、どちらにも属さない移行期間であり、それを新たな存在や状況に再統合していく過程だという。つまり葬儀によってある状態が処理され、変換されていくと把握するのである。

葬儀の骨格は、「遺体」が「死の物理的処理」であるが、併せて「死者の非肉体的人格」や「残された生者」が処理されていく。「死者の非肉体的人格」は、死者の表象を創出させ、死者が一連の儀礼を経て死霊や祖霊へと変容し、現実社会の中で一定の位置を獲得する。祖霊とは当該文化が規定するもので、「死の文化的処理」の所産と言える。「残された生者」は、死者の生前の役割を生者に再分配し再編成する「死の社会的処理」に関わる。葬儀は死者の物理的、文化的、社会的な再構成を行ない、死を重層的に処理する総合的処理装置であるという。以上の観点から、論者は死や葬儀を文化人類学や民俗学の立場から分析する。伝統的な葬儀の研究の蓄積は多いが、現代の葬儀の変容に関する研究は少ないので、現代の変化に焦点を据えて葬儀の考察に取り組むという立場を明確にする。

第2章・第3章では伝統的な村落社会での葬儀における死の処理法を考察している。第2章は新潟県佐渡島の事例で、死に関わる「行為実践」、つまり儀礼とその社会的基盤について述べる。葬儀の過程、その後続く法事、基盤となる物的資源と人的資源、資源を生み出すものとしての家の位置付け、死の準備としての人生全体について述べる。ここでは多くの参加者によって、儀礼・社会レベルで死の総合的な処理が行なわれていることを明らかにし、葬儀に動員される物資や人手などは、家を基盤とした日常生活の中で数世代の長期にわたって蓄積されてきたという。つまり死の過程は、当事者が生前の生活の中で培った物的・人的資源を動員する「長期内在的処理」によって行なわれると見る。一方、葬儀という「行為実践」と並行して語られるタマシの「言説」に注目し、具体的な死の準備がタマシの語りを介して死の速やかな受容に繋がるという。死の観念形成と予兆、葬儀の実践、霊魂の語りが重なり、社会的と個人的、実践と観念の二方向から死の処理がなされて、重層的な対処と相互補完により死が周到に処理されていることが明らかになった。

第3章では、和歌山県古座町の事例から葬儀の変容を考察する。葬儀は人々の移動や情報の流通により改変されるが、ここでは地域社会自体が、自律的もしくは選択的に情報を入手し、それを地域社会の論理に基づいて積極的に変容させているという。古座では、葬儀を地域共

同体の儀礼として執行する意識が根強く継続し、慣習を遵守する傾向が強いが、それを支えたのは、人間どうしのツキアイに依存したテットイドと呼ばれる葬儀の助力者であった。一方、この地域には新しいものを求めるシンモノグイの傾向があり、土地の知識人の葬儀についての言説を受容して、新たな様式を生み出し、儀礼の過程を変更し、葬具や食事の意味を変えるなどの動きがある。こうした傾向は、地域から遊離しようとする個人が、地域社会に積極的に対処して、内在的に変化していると見ることができる。元来、死の処理は長期限内化された資源を動員しており、一定の地域の枠内での互酬関係を基盤としていた。その関係が維持できなくなった場合、自然に解消するだけでなく、損害を最小にするために、互酬性の断絶を表明する積極的な対応がなされているという。個々の家は徐々に地域社会から遊離していく傾向があり、ツキアイを薄めて狭い血縁を基にした限定した関係だけが残るようになる。そこで喪失した物的・人的資源を補完し、死の処理を代行するようになったのが葬祭業者であり、当初は付加的な役割から介入し、次第に葬儀全体を担い実務と知識の提供者になった。これが葬儀の外在的变化であるとする。その軌跡を、古座における葬祭業の成立や変化、葬具の差異化、地域社会との葛藤、地域住民でもある葬祭業者の模索などから考察する。また、葬儀の担い手であったテットイドが、葬儀での互助という役割を解消する事例があらわれ、死をどこへ託すのかという問題が起きている事を指摘する。

第4章では、葬祭業者の実態を都市を主体に考察する。最初に、東京の区部の資料に基づいて、死の処理を担う葬祭業者と利用者の関係に焦点をあてて、葬祭業の成立とその様態を見る。葬祭業者は、葬儀の効率化を担い、死の処理を喪家や地域社会に代わって代理・代行していくと考える。資料に依拠しながら、葬祭業者の種類（専業業者、冠婚葬祭互助会、農業協同組合の葬祭事業）、関連事業と下請け業者の在り方（生花業者、祭壇・葬具メーカー、霊柩車、飲食・返礼品の提供者）、そして葬祭業の分業化について考察する。葬祭業者は個々の業務を累積していく中で、葬儀をトータルに請け負うようになっていった。個々の業務の累積によるので分業化も容易であり、現在では細分化していることがわかった。次に、現代的な葬儀の在り方として社葬に注目し、東京都品川区に本部を持つ大きな葬祭業者の創業者が亡くなった時の事例を、地域社会との関係に焦点を置いて分析し、業界団体のつきあいの様態や会社の営業の実態を明らかにしている。この実態調査から、葬祭業者の業務は、

都市でも地域社会のつきあいを基盤として展開していたことが判明した。また、これを契機として社葬のモデルが形成され、様々な企業の社葬に変化をもたらした。しかし、葬儀の基盤は地域社会から遊離する傾向をとり、その結果、葬祭業者は1980年代以降、企業や公的機関など別の分野へ積極的に営業展開したという。

第5章では葬祭業者を利用する人々の側を考察する。最初に、東京都豊島区の或る喪家の資料から葬祭業者の利用法の変遷をたどり、当初の葬具の購入や貸出しから、次第にサービスの提供を含めるようになり、葬儀を全体として依頼していくようになる状況を把握し、これをもとに明治・大正から昭和初期に至る葬祭業の変遷、葬法の変遷と葬具の使用の変化、葬祭業の利用の変遷が辿られる。次に、現代の東京都江東区に本部を持つ冠婚葬祭互助会の資料から、利用者が葬祭業者を知識の提供者として位置付けていることを指摘する。臨終時の物品の利用法、受注に際しての知識提供、納棺にみられる死出の旅路観の形成、通夜・葬儀の司会、日常生活への復帰法などの具体的な分析に基づき、葬儀の具体的な方法とそれに関する知識の提供者として葬祭業者が活躍していることを考察する。人々は葬儀をトータルに依頼していくようになり、その過程で葬儀の知識の欠如を業者が補うだけでなく、積極的に儀礼の方式や手続きを提示し、儀礼の意味まで説明しているという。最後に、葬儀の祭壇を取り上げて死の受容の変化について述べる。現代の葬儀での大きな変容は、奥から祭壇へという変化にあるという。その過程は、社会的役割を顕示する役割を担っていた葬列が消滅し、死が他界への「旅立ち」であったものが、葬祭業者の用意する祭壇によって他界への「再生」へと死の受け止め方が変わるという指摘である。葬祭業者が死生観の形成にも深く影響を及ぼすようになっていのである。こうした変化は、遺体を柩と輿によって移動させる時代から、祭壇の成立、霊柩車の登場、棺かくしの誕生、彫刻祭壇の成立、祭壇のモチーフの洗練、祭壇の社会的性質の変化を経て生じたものであり、現代の祭壇至上主義の葬儀は、他界のリアリティの現前化となったという。葬祭業者が死の処理の代行から処理法や意味付けを創造する主体へと代わりつつあることを明らかにしている。

第6章では結論として、長期内在的な死の処理法とその変容、エージェント(agent)としての葬祭業者、外在化した死の処理という三つの観点がこの論文の骨子であることを示している。結論としては、現代の葬儀では、死の内在的処理から外在的処理へという方向性が顕著で

あり、葬祭業者は死の外在的処理のエージェントとして存立しているということである。葬祭業者は、遺族の依頼を受けた「代理人」として、死の処理を代行してきたが、当事者が死の処理に関する知識を消失するに伴い、それに代わって葬祭業者自身が儀礼の意味づけを提供し、積極的に死の処理に関わる「行為主体」となった。つまり、葬祭業者はエージェントの二つの意味、「代理人」と「行為主体」という双方を保持する者として、単に死体の外在的処理に関わるだけでなく、現代における死の意味を変容させ、死を受容する在り方を大きく変えつつあるというのである。

本論文の評価すべき点を以下に指摘する。第一に言えることは、現代における葬儀や死の意味の変容を的確に把握していることである。その特徴は、人々が葬儀を効率化していく中で、互酬的な関係を切断していく傾向があり、それによって人々の関係はその時点限りの一時的なものとなり、死者の生前に遡るような長い時間的連続性を持たなくなったことにある。葬儀に動員する資源は、自らの生活領域に蓄積されるものではなく、全く別個に外部に存在するものから提供されるようになった。その資源を提供するものとして機能したのが葬祭業者であった。葬祭業者は契約に基づいて葬儀を請け負い死の処理を行なう。そして葬儀を商品化し、トータルなバックとして金額に応じてメニュー化することで、死の処理法も市場経済に基礎をおくようになる。結果として、人々は金銭を媒介として死の処理を行なっていることになる。

第二は葬祭業者の特徴を明確に位置付けたことである。それは以下の4点である。①葬祭業者は個々の業務を積み重ねていく中で次第に葬儀全体を請け負うようになり変化した（第3章第3節、第5章第1節）、葬儀をトータルに扱うようになって業務の分業化が容易で、業務の下請けが行なわれ、専門業者が細分化している（第4章第1節）。②葬祭業者の業務展開は地域社会を基盤としており、村落においては地縁や血縁を利用して営業を行ない業務を展開しているが（第3章第3節）、都市においても当初は基本的には地縁を利用しており、このことは葬儀業者の社葬において顕著であった。但し、現代は葬儀の基盤が地域社会から分離し、企業や公的機関への積極的な営業が見られる。③地域社会から葬儀が遊離していく過程で、人々の葬儀に関する知識が欠如し、それを業者が補うだけでなく積極的に提供し、儀礼の定義まで行なう事態に発展し（第5章第2節）、従来の正統的な知識を保有していた特定の人物にとってか

わって、新たな正統性の提示も行なうようになった。④葬祭業者の影響が、葬具の使用法の意味づけを通じて、死の受容といった死生観のレベルまで深く及ぶようになり、葬列を通して死が他界への旅を表象するといったように、民俗的世界観と地盤を共有していたものが、葬祭業者の用意する祭壇によって他界への再生、現世での浄土入りを確認させる方向へと変化したことを説明した（第5章第3節）。

第三は死や葬儀の分析に基づいて、民俗学の現代における役割を再考させ、現代社会の分析への理論的展開の可能性として示した点にある。それは以下の3点である。①死をめぐる民俗の伝承母体が、地域から遊離し、その主体が家族や親族といった実体的組織よりも、業者やメディアを媒介としたネットワークを基盤とする方向に向かっていると捉え、エージェントによって結びついた選択可能なバーチャルな共同体の存在についての分析を示唆した点である。②葬祭業者のような新たな行為実践の主体となるエージェントは、消費流通社会に依存し、高度経済成長期以降に登場した民俗の担い手となって、儀礼を操作し商品化しメニューとして流通消費させることを生業とすることから、消費の民俗学という観点の導入を迫られているという指摘である。③消費や流通を媒介にしたバーチャルな共同体によって担われた葬儀が、意外にも過去の民俗世界をプリコラージュによって再構成していることであり、民俗の生命力の根強さを証明することになっている。

人々が現代社会の中でどのような死生観を持つに至るのかという問題は、脳死や臓器移植とも連動しており、現代の人間の生き方を問い直すことになる。その点で本論文は学界のみならず、社会に対しての大きな問題提起を内包している。

しかしながら、幾つかの問題点もある。第一に自分が調査を行なった地域のオリジナルな資料に基づいて論文を構築しようとする意欲が強いために、資料が限定されていることが挙げられる。この点については先行論文や事例研究を類別化して取り入れれば、より内容豊富な議論が展開できたと思われる。第二に農村と都市の変容を記述しているが、都市部で始まった変化が農村にフィードバックしていく過程についての説明が十分でなかった。特に、高度経済成長期に都市に流出した世代が親の代になり、地域社会から分離した死の処理システムを再構築していく過程をもう少し詳細に論じて欲しかった。第三に葬儀の理解に関してであるが、「悲しみの出来事」は、死後直後に限定されず、長い期間にわたる年忌供養

を経て弔い上げによって完結する文化装置として理解する必要があり、この点については柳田民俗学の成果を今少し取り入れるべきであったかもしれない。第四に死後には肉体から遊離すると考えられている死霊と人間との新たな結びの過程があるが、これに強く関与する僧侶や寺院の役割の叙述が希薄なので、論述に必要な範囲で考察を加えるべきだったと思われる。第五に葬祭業者がエージェントであるという指摘は的確であるが、近年、葬祭業者に一連の生命操作の知識が大きな影響を与えつつあり、死や葬儀には生命倫理の問題を避けることが出来ない。例えば、「もやいの会」の「お髪塚」(DNA保存のための真空パック)や宇宙葬、或いはDNAメモリアル(遺体から採集されたDNAを解析して、サンプル片と共に位牌に収納し、遺伝子操作に備える)などは、将来の医療技術を見据えた商品開発である。今後は社会情勢の急激な変化に素早く反応する葬祭業者の動態に注目することが必要であろう。以上のように本論文には、なお解明すべきことが残されているが、これらの指摘は、文化人類学・民俗学・宗教学の領域において未踏の分野に挑んだ本論文が、更なる論議の誘発剤となることへの期待をこめてのものである。

上記の審査の結果により、筆者は本論文によって博士(社会学)の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士(平成13年2月27日)

乙 第3454号 有末 賢

生活史の社会学—その方法と課題—

(論文審査担当者)

主査	慶應義塾大学法学部教授・ 大学院社会学研究科委員 社会学博士	川合 隆男
副査	慶應義塾大学経済学部教授・ 大学院社会学研究科委員 経済学博士	中川 清
副査	東京教育大学名誉教授 文学博士	中野 卓

論文審査の要旨

『生活史の社会学—その方法と課題—』と題された本論文は、人間がそれぞれに生涯にわたって生きる多様な歩みや生き方に関する生活史という問題・研究領域をと

りあげたものである。人間生活の個人生活史に主として焦点をあてて、現代社会学の理論的な課題と方法論的な課題、主題と方法、とを共に複合的に把握しながら、特に方法論的な課題に着目して自己と他者、生活者と研究者、被調査者と調査者とのかかわりを基軸に生活史としてのデータ、データ収集、データ分析の視点から生活史(ライフヒストリー)研究の可能性を開拓しようとする意欲的な論文である。論文構成は、全13章であり、序章、第1部現代社会学と生活史研究、第2部生活史の意味論、第3部生活史の応用と解釈、そして終章と大きく分けて3部構成となっている。

I. 本論文の構成内容(目次)

本論文の構成内容(目次)は以下の通りである。(各章内の節立ては省略)

- 序章 「生活史」の社会学に向けて
- 第1部 現代社会学と生活史研究
 - 第1章 生活史研究の視角
 - 第2章 生活研究とライフヒストリー
 - 第3章 生活構造論とライフコース研究
 - 第4章 生活誌研究と奥井復太郎
- 第2部 生活史の意味論
 - 第5章 質的社会学としての生活史研究
 - 第6章 〈意味の社会学〉と生活史研究
 - 第7章 生活史における記憶と時間
 - 第8章 生活史調査の意味論
- 第3部 生活史の応用と解釈
 - 第9章 重層的都市文化への生活史的アプローチ
 - 第10章 移民研究と生活史研究—日系人・日系社会研究の方法論的課題—
 - 第11章 日系ペルー人のエスニシティ変容
 - 第12章 生活史と「生の記録」研究—ライフヒストリーの解釈をめぐって—
 - 第13章 彷徨するアイデンティティー—ライフ・ドキュメントとしての日記と作品—
- 終章 再帰性とライフヒストリー—生活史研究とポストモダン—

II. 論文の概要

序章「生活史」の社会学に向けて」においては、本論文の主題がなになのかを明らかにするうえでまず生活史の社会学的研究の意義と課題をとりあげ、先行研究の概括がなされる。1970年代以降現在までの第3期にあたる生活史研究の再興期の動きに焦点をあてて、同じ時期